



みえこ女性クリニック 婦人科・産科・内科



クリニックのご案内

診療内容と方針

料 金 表

スタッフ紹介

女性外来コラム

みえこ院長エッセイ

トップページへ

みえこ院長エッセイ

第1回 最近の若い女性に思うこと<その1>

色白、きゃしゃ、茶髪、奇妙なファッション、省略した言葉、電車の中での化粧。これらはまだ良いとしましょう。

目の前を歩く女性の歩き方、階段を降りる靴の音にどうしても目が行ってしまい、耳を傾けてしまう。その不自然なひざの曲がった歩き方や歩くたびに鳴るカタカタという足音。これらは決して美しい物でもなく快い音でもない。ハイヒールのコツコツという音がどんなに快く響くことだろう。そういった情景を見るにつけ職業柄考えてしまう。体に合わない高いヒールの靴を履いて歩くと、膝と腰が曲がって結局は腰痛の原因になるのでは？ミュールとかいう靴？でおこる音そして足元の不自然な力。

日本人は流行に敏感で表面のまねはすぐ浸透してしまうし、自分の物にするのが上手である。しかし本当のオシャレとは見た者が美しいと感じてくれることではないか？そしてそのオシャレが体に将来悪影響を及ぼさないものであること。周りが不愉快でないオシャレをしてほしいものである。

[←目次へ戻る](#)みえこ女性クリニック
婦人科・産科・内科

〒173-0005

東京都板橋区仲宿 64-6 コスモ和光ビル2F

Tel. 03-5943-1123 Fax. 03-5943-1112

[e-mail] dr_mieko_1016@coffee.ocn.ne.jp

Copyright(c) 2005 Mieko ladies clinic All Rights Reserved

[クリニックのご案内](#)[診療内容と方針](#)[料金表](#)[スタッフ紹介](#)[女性外来コラム](#)[みえこ院長エッセイ](#)[トップページへ](#)

みえこ院長エッセイ

第2回 今どき流行のキモノ

ファッションは繰り返すということばがあるが、まさにそうである。

それに郷愁とでも言うのだろうか？

やけに昔見たもの・聞いたもの・食べたもの・着たもの・使ったものそれらを又身近に感じたくなる。

キモノは、昔母が時折着ていたがさほどの感慨・興味もなく最近まで暮らしてきた。遊びでキモノを着たのがきっかけで、ちょっとほめられたりして少し興味が湧いた。

ちょうどその時、新聞広告で無料キモノ着付け教室を見つけた。すぐさま応募すると、うまい具合に空き曜日に教室の入学を許可された。一本気の私は毎週欠かさず教室に足を運び4ヶ月を通いあげた。

若い女性が可愛いキモノを着たりリサイクルのキモノをうまいコーディネートで着こなすのは新鮮で良い。また30～40歳代の女性がシックな色の着物を着こなすのも、またつやつぽくて良い。60歳以上の婦人が装うと立派な淑女に見えてくる。なんとも不思議なキモノの魅力である。

ミニスカートから見えるすんなりとした足は、見ていて気持ちが良い。しかしキモノからチラチラ見え隠れする足は細かろうが太かろうが、ドキッとするほどなめかしさを感じる。胸元の大きく開いた洋服はまぶしいが、胸元をかくしても斜め後ろから見るうなじは更に色気を感じる。

好きなオペラをヨーロッパまで観劇に行ったとき、思い切ってキモノを持参した。着付け一日目は慣れない手であったが、西洋人の中でもまた日本人の中でもかなり目立つ存在になってしまった。同胞の方から「キモノの先生ですか？」と聞かれ、下をむいて笑ってしまった。着付け二日目は、満足のいく手であった。

秋に着るキモノは、快適である。それでも長時間に及ぶと帯のあとが皮膚炎をおこし痒みが出てくる。夏のキモノは脱いだ後の皮膚の治療が大変である。治るまで一週間はかかる。回りの人に夏着るキモノのコツを聞いたりしたけど……。昔の人はいったい真夏までキモノを着て皮膚炎を起こさなかったのだろうか？着付け教室の先生は、いったいどう対処しているのだろうか？皮膚の敏感な私として目下くふう中である。

先輩方、＜教えてください＞季節とキモノのつきあい方を。

[←目次へ戻る](#)



〒173-0005

東京都板橋区仲宿 64-6 コスモ和光ビル2F

Tel. 03-5943-1123 Fax. 03-5943-1112

【e-mail】 dr_mieko_1016@coffee.ocn.ne.jp

Copyright(c) 2005 Mieko ladies clinic All Rights Reserved



みえこ女性クリニック 婦人科・産科・内科



クリニックのご案内

診療内容と方針

料 金 表

スタッフ紹介

女性外来コラム

みえこ院長エッセイ

トップページへ

みえこ院長エッセイ

第3回 最近の熟年カップルに思うこと

若いカップルはちまたにたくさんあふれている。

土曜日曜のレストランや酒場にもあつあつ？ 友達同士？ 同姓のカップル等楽しそうに語らっている。

終電車近くの新宿JR駅の改札は別れを惜しむカップルで一杯である。
数年前には私も出歩く機会があまりなかったのでそんな光景は無縁だったが、最近では遅くまで出歩いているのでいろんな光景を目にする。

他人を含めて実感するが、離れて歩くご夫婦の記憶はさらっと忘れる。
しかし手をつないだり腕を組んだりしている熟年カップルはどうしても詮索と興味 の目で観察したくなってしまう。

そこで観察者の心理を分析してみた。

- ・ どんな顔の（美しい？ 年は？ 自分と較べては？）人たちかな？
- ・ そのバックにはどんな家庭環境があるのかな？
- ・ そんな年齢で（いい歳をして）、年甲斐もなく。
- ・ 羨望？（自分ももう一度青春してみたい）

誰かが言っていた＜人生いつも青春＞。

いつも一生懸命頑張っている人の目って、輝いてる。

恋愛だけでなく、何かの目的に向かって一生懸命な人ってどこか違う。

でも思う、皆すべてが幸せな人っていないことを。

皆いろいろな問題をかかえて生きている、それはあたかも自分の身体にできたあざや時にはおできのように。

それでも確信しているのは、一生懸命なひとって必ず報われるということ。

まあ、とにかく一生懸命生きよう！

あきらめないで目的を持ち進み、

そして生きている内にどんどん人を好きになろう！

生かされているという事は、きっと意味あることだと思う。

[←目次へ戻る](#)

〒173-0005

東京都板橋区仲宿 64-6 コスモ和光ビル2F

Tel. 03-5943-1123 Fax. 03-5943-1112



みえこ女性クリニック
婦人科・産科・内科

【e-mail】 dr_mieko_1016@coffee.ocn.ne.jp

Copyright(c) 2005 Miko ladies clinic All Rights Reserved

[クリニックのご案内](#)[診療内容と方針](#)[料金表](#)[スタッフ紹介](#)[女性外来コラム](#)[みえこ院長エッセイ](#)[トップページへ](#)

みえこ院長エッセイ

第4回 今女性外来が流行っている訳

社会における女性がそれだけ重要視され、大切にされるようになってきた。

日本全国に病院・診療所ができ、まずは国民への医療がほぼいきなり今度は医療の質の向上と特徴をだそうという考えだ。

家庭をささえ社会をささえ、ひいては国をささえる女性の健康管理を、心と身体両方からケアし守るプロジェクトがこの〈女性外来〉なのだと思う。

人にはさまざまな好みがあり、同性の先生を好む人、反対に異性の先生を好む人もいる。

特に婦人科の場合は、前者の傾向があり女医さんが引っ張りだこのようだ。女医のほうがあたりが柔らかく気持ちもわかってくれそう。

診察時の恥ずかしさも、男性の先生よりは少ない。

女性外来は、女性のトータルケアの外来だが、必ずしも女医である必要はない。

しかし受診する側からすると、つい女医を連想するし男性がいるとびっくりにしてしまう。

そこでなるべくクリニックを女性スタッフで維持できるよう努力する。

そうやってできたクリニックの一つが〈みえこ女性クリニック〉でもある。

いままで更年期の方々と接していろんな話を聞いてきたが、夫・舅姑・隣人・自らの内面・時に職場関係等、話す場もなくうちにためて悩み苦しんでいることがよくあった。

誰もみな心の中のことを放出し話したがっているのだ。

ところがなかなか話す相手がない、上手な聞き手がない。

話すだけでも随分救われるし、悲しい時は思いっきり泣いて涙を流せばいい、しかしなかなかこれができない。

お年をとればいろいろな経験もし、いろいろなしがらみもできる。

そのストレスがズシッと心にのしかかるのは、よくわかる。

ところで女性外来のおかげで若い女性も婦人科を訪れやすくなった。

受診のきっかけは生理不順やおりもの・かゆみまたはその他もろもろであるが、話し始めてから心の扉が少し開き始めると幼少時から今日までの抱えていたわだかまりがドーと口からあふれてくる。

年を経なくとも現代の若者もストレスをこんなに抱えているのだとつくづく感じてしまう。

いつの時代も思春期があり悩み・苦しみ・落胆・失敗・悲しみなどなどあったはず。

違うのはそれらの時代背景と複雑な社会環境であろう。

またインターネットの普及でたくさんの情報がさらに心配を助長させることもある。

まあ、頭でっかちということかな？

とにかく現代社会でストレスを抱え、それが原因で肉体的な疾患をきたしてしまう女性よ！はやく心の扉を開けられる信頼できる友達や環境探しを、はじめよう！

[←目次へ戻る](#)



〒173-0005

東京都板橋区仲宿 64-6 コスモ和光ビル2F

Tel. 03-5943-1123 Fax. 03-5943-1112

[【e-mail】 dr_mieko_1016@coffee.ocn.ne.jp](mailto:dr_mieko_1016@coffee.ocn.ne.jp)

Copyright(c) 2005 Mieko ladies clinic All Rights Reserved

[クリニックのご案内](#)[診療内容と方針](#)[料金表](#)[スタッフ紹介](#)[女性外来コラム](#)[みえこ院長エッセイ](#)[トップページへ](#)

みえこ院長エッセイ

第5回 我が子に悩む親たちへ

この間まで親のあとをくつついて、ピーピー泣いていた子がいつの間にか親の意思に反して行動し、何を考えているのかまったくわからない状態になっていませんか？

まず学校に行きたくない、夜昼逆転、外出したくない、テレビゲームばかりしている、仕事しない、ぶらぶらして毎日過ごす等。

こんな経験をもっている親はたくさんいるはず。

子供のわけのわからない行動にどんなに悩み、多くの人に相談し解決策のわからないまま何ヶ月、何年すぎていったことでしょう。

全ての子供たちがこの例に当てはまるわけではありませんが、個性さまざまに育ってきた子供たちは決められた枠内におさまらないケースもたくさんいるのです。

オートメーションで作られた製品だって、ふぞろいな物ができます。

子供たちの場合はオートメーションではありませんが、このふぞろいの中にこそ磨かれてないダイヤの原石が眠っていることをご存知ですか？

きれいな石とこの原石を同じ箱におさめるのは見た目にも無理がありますし、又この原石をどのように見つけて導くことができるのか、それが大人達の務めなのです。

ダイヤの原石は愛情を求めています、愛情こそが子供たちの栄養なのです。

よく考えてみてください。

これまでに愛情のかたよりはありませんでしたか？

愛情が薄くても、濃すぎてもいけないのです。

程よい愛情こそが子供たちにとってすばらしい栄養素となり、すくすくと才能を伸ばせる必需品なのです。

それといつも親が前向きに生きること。

この世界で成功しようとか、一流になろうとか、トップになろうとか、又そうさせようとか絶対思わないでください。

オンリーワンこそが個性をのばす道だと、私は考えます。

[←目次へ戻る](#)

[クリニックのご案内](#)[診療内容と方針](#)[料 金 表](#)[スタッフ紹介](#)[女性外来コラム](#)[みえこ院長エッセイ](#)[トップページへ](#)

みえこ院長エッセイ

第6回 英会話をとうして

仕事や海外旅行のために英会話を始めた。

かれこれ3年がたった。

教師は外国人のため、外国人恐怖症はなくなったし簡単な質問に答えることが出来るようになった。

しかしジャンルの異なる話題は、まず日本語での考えもまとまらずましてや英語での翻訳まで出来ようがない。

わが身の知識の狭さやあまりに日本の文化を知らないことにつながりしたものだ。

学生時代は英語が好きで、多くの学生がそうであったように文法はよくわかった気でいた。

要するに生きた英語より机上の学問ばかりしていたわけだ。

今回の英会話教師の評価では、積極性や発想の点はよかったが、文法は努力を要するとの事だった。

これにもがっかりさせられた。

あるとき宝塚ミュージカルの話をした。

〈なぜ女性が男装するミュージカルが好きなのか？〉と聞かれた。

それは女性が理想とする男性像を、女性自ら演じることにより女性を理想の世界へ連れて行ってくれるから。

現実には夢を持ってない現状があり、宝塚の世界で幸せを感じられるから。

一時ではあるが自分が物語の主人公になり、現実を忘れられるから。

〈日本の歌舞伎は男性が女役をするし、この逆が宝塚なのよ。〉

何だか現実逃避みたいな理由になってしまった。

でもこれらが上手く英語で伝えられない。

ああ、もどかしい。

D先生は、よくサムライの話をする。

日本のサムライスピリットに尊敬とあこがれを持っているらしい。

でも今の日本にサムライスピリットって、どこにあるの？

本当のサムライがいたら、私もミュージカルにハマラナイカモ。

この年になって若い人たちに混じって（自分の子供と同じ）英会話を習い、かつ今年からはプライベートレッスンも追加して励んでいる。

月に、可能な限り宝塚ミュージカルを観に出かける。

年間に、何回か硬式テニスの大会に出場し励んでいる。

よる年波の老化とたたかって、一生懸命記憶・気力そして体力の保持につとめる。

いろんな事にチャレンジしていて、もっとも良いと感じるのはその一瞬はまさに青春の頃とまったく同じ精神状態になっていることだ。

現実にもどった時、ジレンマのなかで〈体力は何時までもつか〉と考える今日この頃である。

[←目次へ戻る](#)



〒173-0005

東京都板橋区仲宿 64-6 コスモ和光ビル2F

Tel. 03-5943-1123 Fax. 03-5943-1112

[e-mail] dr_mieko_1016@coffee.ocn.ne.jp

Copyright(c) 2005 Miko ladies clinic All Rights Reserved



みえこ女性クリニック 婦人科・産科・内科



クリニックのご案内

診療内容と方針

料 金 表

スタッフ紹介

女性外来コラム

みえこ院長エッセイ

トップページへ

みえこ院長エッセイ

第7回 クリニック一周年を迎えて

昨年12月にこの板橋の地に開院し、早1年が経ってしまった。

たった3ヶ月の準備期間で立ち上げてしまい、何ともパワフルに行動したものだ
と今考えても感心してしまう。

独立については既に数年前から考えていたが、いざその時という場には後ろか
ら肩をちょっと押してくれる力が必要だと思った。

人生で、やはり一足踏み出すときにはこの力が必要になる。

また人生にはおのずとその時というものがあり、全てがスムーズに運ぶ時期が
ある。

逆を言えば問題だらけの時もあり、どう頑張っても前に進まないこともあるも
のだ。

そんな時はじっと時間の過ぎるのを待てばよいのである。

あまり急ぎすぎて保険診療が間に合わなかった、医師会の入会も半年待ちをし
た、母体保護指定医の申請もおくれた。

すべてそろったのが丸一年になる時だった。

とろとろと過ぎるうちに、たくさんの患者さんとお友達ができた。

何回も外来で会ううちに、気心の知れたお友達のようにもなれた。

又昔からのなじみの患者さんとは、さらに親しみが加わった。

病気のことであればこちらから助言ができるし、少しは元気づけることも出来
る。

逆に患者さんからのパワーをいただいたり、病気について勉強させられること
もある。

一日一日が新たな経験と勉強の連続でもある。

独立するまでは、感じられなかったある種の楽しさを今感じている。

自分カラーの診療とアイデアをとおして、患者さんと接し十分な手ごたえを感
じているからだ。

クリニックの診療室にすわり、今日はどんな方が又どの方が訪れてくるのか
なと心待ちにしているこの頃だ。

ここを訪れる方の身になって治療をすすめるのが指針である。

そして私が少しでも、ここを訪れる方たちの力なれば本望である。

[←目次へ戻る](#)

〒173-0005

東京都板橋区仲宿 64-6 コスモ和光ビル2F

Tel. 03-5943-1123 Fax. 03-5943-1112



みえこ女性クリニック
婦人科・産科・内科

【e-mail】 dr_mieko_1016@coffee.ocn.ne.jp

Copyright(c) 2005 Miko ladies clinic All Rights Reserved



クリニックのご案内

診療内容と方針

料 金 表

スタッフ紹介

女性外来コラム

みえこ院長エッセイ

トップページへ

みえこ院長エッセイ

第8回 テニスをつづけてよかった

私のテニス歴は、中学・高校・大学・社会人と随分ながくつづく。

昔、硬式テニスはブームでなく、軟式が主流であり私もこれに順じた。

甘えん坊で末っ子の私は（四人姉弟の三女）、中学のクラブ活動（テニス）を通して＜根性・礼儀・友情＞ということばを教えられた。

また大学のテニス活動を通して、更にこのことばが私の人格形成の基本となった。

大学を卒業して、更に進路変更のため新たな大学へ再入学を決めたときも＜根性＞もしくは＜負けず嫌い＞が根底にあったと思う。

6・3・3・4・6年を終了し社会にでて、同期のフレッシュマンより四歳以上年長だった（自分より若い先輩と接するのは、当初は大変だった）。

結婚・妊娠・子育て・フル勤務と無我夢中で過ごしたが、ひとり何役も上手にこなせるはずもなく、どれも不十分であった。

唯二、仕事は中断することなくフルで働き、子育ては曲がりくねりながらやっと社会に送りだす直前まできた。

その他もろもろは、まさに失敗だらけになってしまった。

精神的に苦しいとき、いつときテニスコートにいるときだけは全てを忘れられ一球に集中でき、目の前のストレスに立ち向かうエネルギーを得られた。

ここ数年またテニスができる環境になり、少しゆとりを持ってラケットを握っている。

少し欲がでて最近では、テニストーナメントにも参加するようになった。

もちろん誘われればテニス合宿にも参加する。

今まで何十年かの私の歴史のなかで、折にふれテニスは私を元気づけ又ストレス解消にも役立ち、数多くの友人も作ってくれた。

又いまや美容と健康（肥満と冷え）にも多いに役立っている。

友達づくりも、年齢が進むとなかなか上手い出来ない事が多いが、趣味のおなじもの同志は不思議と昔なじみのように接することが出来るようだ。

テニスコートの私たちは、屈託がなくまるで子供ようである（社会的には立派な地位のある大人であるが）。

テニスに限らず、スポーツや同じ趣味の集まりは結構結束が固いものである。

粘り強く（裏をかえせば頑固）、ひとつのことに集中（猪突猛進）し、へこたれない性格はまさにテニスをから学んだ私の宝物である。

[←目次へ戻る](#)



みえこ女性クリニック 婦人科・産科・内科



クリニックのご案内

診療内容と方針

料 金 表

スタッフ紹介

女性外来コラム

みえこ院長エッセイ

トップページへ

みえこ院長エッセイ

第9回 最近の若い人たちに思うこと

最近、よく外国の方たちをみかける

東京に限らず、地方都市やわたしの田舎でも、状況はおなじである。

同じように日本人とくに若者の海外留学やワーキングホリデーと称する渡航が増えている。

海外に行けばよいというわけではないが、今どきの若者にはとてもすばらしい勉強だと思っている。



不登校・いじめ・引きこもり・アダルトチルドレン等々すべては幼少からの環境、特に母子関係には少なからずの関係があるのではないかなと思う。

甘えの蜜のなかで育った若者に、この海外生活はまさに良い経験である。

<他人の飯をくう>とはよく言ったもので、知らない異国で自らの力で生活しコミュニケーションをとり生きぬく・・・幼少期からの自立のすばらしい方法ではないか。

若者が渡航を考え出したら、はばんではいけない。



未知なる海外での生活は私のあこがれでもあり、同時に恐れでもある。

私が若者のころなら決して行けなかったであろう海外。

この年齢になって、遠く思いをはせる。

<住んでみたい。一時の旅行ではなくて。>



私の娘は、通称**<飛ばしや>**と言われているらしい。

彼女と親しくつき合う男・女友達はことごとく海外に、長期的（1年以上）に行ってしまう。

今度は、弟まで飛ばしてしまうらしい。

[←目次へ戻る](#)

みえこ女性クリニック
婦人科・産科・内科

〒173-0005

東京都板橋区仲宿 64-6 コスモ和光ビル2F

Tel. 03-5943-1123 Fax. 03-5943-1112

【e-mail】 dr_mieko_1016@coffee.ocn.ne.jp

Copyright(c) 2005 Mieko ladies clinic All Rights Reserved



みえこ女性クリニック 婦人科・産科・内科



クリニックのご案内

診療内容と方針

料 金 表

スタッフ紹介

女性外来コラム

みえこ院長エッセイ

トップページへ

みえこ院長エッセイ

第10回 着付け教室、再開

あれから二年、着付け教室に再び通いだした。

なぜって？

袖に手を通さない日々が続いて、ある時<どう着るんだっけ？>という疑問がでてきた。

何とか形になってはいるが、どうも詳細な部分の始末がうまくいかない。

手順が不鮮明。

疑問がどんどん出てくる。



全四ヶ月あまりの教室には、十名ほどの生徒が集まり、六十歳（more）の先生がてきぱきと教え、皆をひっぱっていく。

さすがベテランの先生は、こまごまとこつを手ほどきしてくれる。

私はクラスの劣等生。

今まで習った方法と違い、なかなか上手く手が動かず慣れない。

覚えの悪いのは、老化や出席率のわるい影響もあるが、一度入った学習を訂正するのも難しい（先生によって、着方が異なるからだ）。

しかし着物を愛し、着るチャンスは最大限実行し、もっと上手になろうと一歩うえにチャレンジする私だからそのうちには・・・。

要は、いろいろ知識を教えてもらいその中から必要な部分を習得すればよいのである。



帰り際、先生の雑談が絶好調。

健康管理とアンチエイジングにうんちくがあるようで、なかなかの博学である。

そういえば<先生、若い・・・>と誰かが言った時に、ニヤッと笑った意味ありげな表情を思い出す。

遺伝子・核酸・アミノ酸・若返り・母乳等々、話題は次々とでてくる。

私は、後ろでそっと聞く。

余計なことは言わない、生徒だから。

[←目次へ戻る](#)

みえこ女性クリニック
婦人科・産科・内科

〒173-0005

東京都板橋区仲宿 64-6 コスモ和光ビル2F

Tel. 03-5943-1123 Fax. 03-5943-1112

[e-mail] dr_mieko_1016@coffee.ocn.ne.jp


[クリニックのご案内](#)
[診療内容と方針](#)
[料 金 表](#)
[スタッフ紹介](#)
[女性外来コラム](#)
[みえこ院長エッセイ](#)
[トップページへ](#)

みえこ院長エッセイ

第11回 生かされていると感じるとき

平均寿命が80歳を越え、みんなが元気に暮らしているかのように錯覚してしまう昨今。

テレビや新聞で取りざたされているとうり、幼児や女子大生を対象とした殺人や事件があとをたたないのも事実だ。

最近地下鉄に乗った時、9割の方が60歳過ぎの方のようにみうけられた。

時間帯にもよるし、場所柄ということも関係するかもしれないが。

しかし高齢化社会であることも事実である。



よく危機一髪で命拾いという話をきく。

電車の一本乗り遅れであったり、座る席が窓側であったり等、ほんの少しの時間差や空間の差がその人の人生を大きく変えてしまう。

また同じ癌でも種類の違いや選んだ病院の違いによって、運命は様々である。一方、若くして病死・事故死・殺害という方たち人は、悲しいことだが運命とあきらめるほかないのだろうか？

そうしてみると、生きているということ増してや50、60、70歳を生き抜くということは素晴らしいこと事ではないかと思われてくる。



私自身、高速道路で一瞬のうたたねからさめてドキッとしたことがある。

また早期がんを自分で発見し、事なきを得たこともあるし、ほんの時間差で保険に入りこの病気をカバーしてもらったこともある。

今では一人前の顔をして仕事をしているが、あの甘ちゃんの私がここまで来るのに数々の難関はあったが、幾分かは **<世の中の役に立てよ>** というメッセージの為かなと思ったりもする。

ここまで生かされてきたのだから、そしてまだ生かされるのであれば・・・。

私は、まだこの世の中に必要とされているのだろう。

社会・友人・恋人・家族・・・そしてここを訪れる患者さんのために。

[←目次へ戻る](#)

[クリニックのご案内](#)[診療内容と方針](#)[料 金 表](#)[スタッフ紹介](#)[女性外来コラム](#)[みえこ院長エッセイ](#)[トップページへ](#)

みえこ院長エッセイ

第12回 私が医者になったわけ

私がこの世に生まれ落ちたときから、私の周りにはお医者がたくさんいた。

しかもそのお医者とは皆、町医者だった。

私はお医者のお家の中で、お医者にお預けられ、お医者になるのが当たり前と思いながら育ってきた。

祖父母、両親、叔母、大おじ、この家族ぐるみのお医者構成が、私の家族だった。

両親は、元旦以外毎日診療をしていたので、休日はほとんどなかった。

夜間の往診は、祖母・母の担当であった。

外来は毎日たくさんの患者さんであふれ、その診療室の大きな肘掛け椅子にすわる母の肩越しから、じっと患者さんを見る私がいた。

病院の庭や廊下そして暗いレントゲン室は、この上もない楽しい遊び場であった。

祖母は、お医者になるまでに三人の子を生み、母はお医者になってから四人の子を生み、そして子育てをしながら診療をしていた。

両親には欲もなく、贅沢もせず、生活の中に家庭と仕事が完全に溶け込んだ暮らしだった。

私は四人姉弟の三番目。

皆同じような目的をもち、そしてお医者になっていった。

ただ一つ違うのは、この私だけお医者にならなかったこと、否なれなかった事だった。



お医者になれなかったある時期、私は毎朝やってくる空虚な気持ちを漠然と感じていた。

この気持ちはいったい何なの？

今の仕事は、本当の私の仕事ではない。

私は、お医者になりたかったはずだ。

そう感じて、行動をおこしてから数ヶ月間は、生涯でもっとも真面目に真剣に勉強に取り組んだ期間だった。



晴れて私は医療の道に入り、そしてその後私の家族のように町医者としての一歩をふみ出した。

かつて頭のてっぺんから足の先までひたっていた消毒と薬の臭い、そしてたくさんの患者さんのまなざしの世界に。

[←目次へ戻る](#)

〒173-0005

東京都板橋区仲宿 64-6 コスモ和光ビル2F



みえこ女性クリニック
婦人科・産科・内科

Tel. 03-5943-1123 Fax. 03-5943-1112

【e-mail】 dr_mieko_1016@coffee.ocn.ne.jp

Copyright(c) 2005 Mieko ladies clinic All Rights Reserved


[クリニックのご案内](#)
[診療内容と方針](#)
[料金表](#)
[スタッフ紹介](#)
[女性外来コラム](#)
[みえこ院長エッセイ](#)
[トップページへ](#)

みえこ院長エッセイ

第13回 おかしな名前の偶然

長男の保育園通いの頃から、仲良しママさんグループがいた。

最初は7～8人だったが、いつの間にか4人のママさんグループになっていた。

長男はすでに22歳になるから、かれこれ20年近い付き合いになるが、未だに集まってお互いの（もちろんママの）誕生会までする付き合いだ。

20年前はこの4組の親子の家庭は、3組が夫帯であった。

20年後は反対に、3組がシングルマザーになっていた。

おかしなことに、このシングルマザーの旧姓と新姓は皆変わらないことだった。つまり、もともと同姓同士の結婚だった訳だ。

私は嫁ぐ前も嫁いだ後も、姓は同じである。

そして今も変らぬ姓を名乗っている。

私の義理妹は、嫁いでから私と同姓同名になった。

義理父母は、二人の区別に頭をかかえ、呼び名を工夫して＜東京の・・・＞とか呼んでいた。

あれから何年も過ぎ、私も彼女もなんとシングルマザーになってしまった。

彼女の名誉のために補足するが、彼女は死別である。

そしていまだに、二人同じ名前である。



かつては、名前から人物の性格がなんとなく連想できるような気がしたし、健康や社会的成功のために改名することもあった。

名前の中に子供の将来を託す両親の愛情が感じられるし、またそれだけ重要視されているわけでもあるのだろう

してみると、私の数少ない経験は偶然の必然で、そうなるべくしてなった名前の運命なのだろうか。

一人かつてに思いおかしんでいる、初夏のプライベートクリニックの一室である。

[←目次へ戻る](#)



みえこ女性クリニック 婦人科・産科・内科



クリニックのご案内

診療内容と方針

料 金 表

スタッフ紹介

女性外来コラム

みえこ院長エッセイ

トップページへ

みえこ院長エッセイ

第14回 無心

何年か前に、金づちだった私が、泳ぎを覚えた。

メチャクチャなクロールだったが、とにかく試行錯誤のすえ25m、50m、200mと距離を伸ばしていった。

300mを越えたとき、不思議に苦しさがなくなりまるで道を歩くように、そのまま1000mまで泳ぎ続けることができた。

この間、1ヶ月もかからなかったと思う。

1000m泳ぐのに50分くらいかかっただろうか。

この水泳から学んだことは、＜無心＞ということだった。

雑念が入って気が散ったりすると、呼吸が乱れ水を飲み、身体のリズムがくずれて泳げなくなってしまう。

つまり＜無心＞にならないと、長距離（私にとっての）を泳ぐことが出来ないわけだ。

このおかげで、この時期私の身のまわりに立て続けにおこっていたストレスの塊りに打ち勝つことができた様な気がする。

＜無心＞の自分を作ることでストレスから開放され、泳ぎきることで充実感がうまれ影と光の自分を上手くコントロールできた。



そして今また水の世界にもどってきた。

たくさんのしがらみの中の自分を＜ゼロ＞にもどし、そこから新たな一歩を踏み出すために。

週に1～2回、午後9時からスタートする＜無心＞の時間は、私のリセットタイムでありエネルギー源だ。

未だに自己流のクロールは他人に見せられるものではないが、タイムだけは短縮できた。

どの競技にも＜無心＞の時間があると思う。

どれを選ぶかは個々様々まであるが、ひとり孤独に泳ぐこの水泳に私は今はまっている。

[←目次へ戻る](#)みえこ女性クリニック
婦人科・産科・内科

〒173-0005

東京都板橋区仲宿 64-6 コスモ和光ビル2F

Tel. 03-5943-1123 Fax. 03-5943-1112

【e-mail】 dr_mieko_1016@coffee.ocn.ne.jp

[クリニックのご案内](#)[診療内容と方針](#)[料金表](#)[スタッフ紹介](#)[女性外来コラム](#)[みえこ院長エッセイ](#)[トップページへ](#)

みえこ院長エッセイ

第15回 着物の下の、内なる心

先日、さる会食に着物で出席した。

メンバーは全員、古式ゆかしい着物をまとい、髪を結い上げ、素敵なスワロフスキー・ビーズ・古典的な帯締めをつけ熟練した着付けだった。

テーブルマナーの指導があり、宴後半で余興が始まった。

日本の古典的な楽器による弾き語りがあったが、演奏のはじめこそ多少のざわめきはあったものの演奏が佳境にはいるころには、ほとんどの人たちはシーンと見聞き入っていた。

この時、近くのテーブルの5～6人のメンバーがひそひそと断続的におしゃべりを行い、挙句のはてには他のテーブルの人々もチラッとにらむ始末だった。

同じ集団の一員として、恥ずかしく思いつつ座っていた。

このグループの指導的立場の方も美しく着付けをしてはいるが、そのジョークや発想はまさに反日本的であった。

そして、この日とても悲しく感じたのは美しい着物の下に相反するマナーを垣間見たことだった。

夏になり、花火大会や夕涼みのためか駅や電車の中で、浴衣姿の男女をよく見かける。

なぜかいつも女性の姿に目を向けてしまうが、現代的感覚で装うその姿に共感できない。

というより襟の開き具合・臀部のふくらみかた・歩き方・しゃべり方、どれをとってもしっくりとした着こなしができていない。

<ただのファッションなのかな>と悲しくなってくる。

最近、日本にはたくさんの外国人が、旅行だけでなく勉強や就業のために訪れる。

この中には日本の古典や芸術に興味をもち、柔道や合気道・茶道・華道と学ぶ人もいる。

外国人にとっては、目に見える芸術だけでなく、その奥にながれ精神にも魅力を感じるようだ。

日本人は、昔から猿まねがうまいといわれていた。

しかし日本の文化・芸術・しきたりは、元来日本独自のものだ。

もう一度原点にもどってよく考えてほしいと思う、日本の心を。

[←目次へ戻る](#)

〒173-0005

東京都板橋区仲宿 64-6 コスモ和光ビル2F



みえこ女性クリニック
婦人科・産科・内科

Tel. 03-5943-1123 Fax. 03-5943-1112

【e-mail】 dr_mieko_1016@coffee.ocn.ne.jp

Copyright(c) 2005 Mieko ladies clinic All Rights Reserved

[クリニックのご案内](#)[診療内容と方針](#)[料 金 表](#)[スタッフ紹介](#)[女性外来コラム](#)[みえこ院長エッセイ](#)[トップページへ](#)

みえこ院長エッセイ

第16回 我が家のハナちゃん

我が家のハナちゃんは、七歳。

茶色のロングヘアのミニチュアダックスフンドである。

とてもチャーミングでぬれた瞳をして、じっとこちらを見つめる。

家族が外出から帰ると玄関でじっと立って出迎えてくれ、うれしそうに部屋を駆け回る。

散歩に行くと、長めのしっぽがお尻と交互にゆれ、何ともかわいい後ろ姿になる。

時々、暗いもの影に姿をかくしたり、息子のふとんに尿をして知らんふりをしていたこともある。

ハナちゃんが我が家に来てから、寂しがりやの息子は明るくなり家族の会話がうーんと増えた。

娘たちカップルの散歩のよきマスコットでもあった。

おかげで私も家の近くをぶらぶら歩くことを覚え、新しい発見をする散歩道になった。



ハナをブリーダーから買った時は、張り紙広告をみて訪ねていったのだが、ハナを抱いた瞬間から<この子だ>と思った。

一緒に生活をはじめて数ヶ月のころ、<あれ？>と不思議に思うことが時々あった。

私の手に感じるハナの心拍が、やけに不整なのだ。

でも動物病院の担当医は、何も言わないし私も聞き返すことはしなかった。

あるとき新人の先生が、何度も聴診器でハナの心音を聴いていた。

<不整脈ありますか？>

ハナは生まれつき心臓に問題をかかえていた。

妊娠と過度の運動は控えるよう、注意があった。

そして五歳のとき、ある朝目がさめるとハナの下半身は動かなくなっていた。

突然の事態に当の本人はぐったりと、悲しい目で横たわっていた。

ハナは、やはり生まれつき腰椎に問題を抱えていた。

五歳の若さで腰椎骨折をわずらってしまったのだ。

しかしどんな問題を抱えても、ハナを手放す気にはとてもなれなかった。

それでも動物は回復がはやいとみえ、徐々に食欲と目の生気をとりもどしていった。



動物は、感情表現や意志表示は出来ても言葉を話すことができない。

ブリーダーも先生も自分の都合で売ったり診たり、全く事なかれ主義でかつ計算高い人たちだとおもった。

他人を信じていた自分の不覚さを思い、反省した。

[←目次へ戻る](#)



〒173-0005

東京都板橋区仲宿 64-6 コスモ和光ビル2F

Tel. 03-5943-1123 Fax. 03-5943-1112

【e-mail】 dr_mieko_1016@coffee.ocn.ne.jp

Copyright(c) 2005 Mieko ladies clinic All Rights Reserved

[クリニックのご案内](#)[診療内容と方針](#)[料金表](#)[スタッフ紹介](#)[女性外来コラム](#)[みえこ院長エッセイ](#)[トップページへ](#)

みえこ院長エッセイ

第17回 旅から帰って

久しぶりに海を渡った。

昔は団体旅行の経験しかなかったが、最近は個人旅行を経験している。

自分の目と口と耳そして足をつかつての旅は、スリルと疲労の連続であるが反面、満足感も味わえる素敵な経験だった。

そして海外で感じたのはふとした他人の温かさや笑顔そしてアイコンタクトだった。

その目は、青や茶や黒さまざまな色をしていた。

日本においては、私たちは海外からの訪問者に温かい笑顔で接しているだろうか？

ロンドンの街並みを歩き、カフェに座り道行く人を眺めてみた。

ハイドパークを散歩し、小鳥のさえずりを聞き、その中でサンデッキに腰をおろしてみた。

ゆったりとした田園の中を電車にのり、時間を感じる旅をした。

久しぶりにゆったりとした時間を過ごし、行き交う人々を見ることができた。

いつもと違う環境の中で、いつもと違う人々をながめて、そして思った。

日本でのアクセクとしたゆとりのない生活を・・・。

毎日、目一杯のスケジュールをこなし、目標に向かって一心に進みそれを充実と感じていた。

お休みのスケジュールは、講演会やセミナーその合間はテニスや観劇・食事会で目一杯。

じっくりと自分を見つめたり、脳の情操領域をリフレッシュするひまは皆無だった。

ゆとりの生活とは・・・。

朝食はお腹を満たすだけでなく、器・盛り付け・テーブルの飾りまで気を配る、そんな生活。

紅茶を飲むときも、きちんとソーサーとカップを使って。

お休みのショッピングはジーパンではなく、お気に入りの着物やドレスをまとって。

疲れ果ててベッドに眠るときも、可愛いフリルのお気に入りのパジャマで。

息子をひとりロンドンに残してきた。

短期の海外生活の経験しかないはずなのに、彼の英語は私のそれよりもずっと相手に伝わった。

またネイティブの会話にポカーンとしている私に、通訳してくれた。

人混みや日常の生活の中では、逆に私を気遣い、帰国の空港ではくさよならは、言わないよ>と言って、見送ってくれた。

これからのロンドンにおける彼の新生活よりも、母を無事に日本へ返すことのほうが心配だと言った。

大人になったものだ。

そして私は日本にもどり、元の生活にもどった。
少しずつ、ゆとりの生活に近づこうと焦りながら・・・。

[←目次へ戻る](#)



〒173-0005

東京都板橋区仲宿 64-6 コスモ和光ビル2F

Tel. 03-5943-1123 Fax. 03-5943-1112

【e-mail】 dr_mieko_1016@coffee.ocn.ne.jp

Copyright(c) 2005 Mieko ladies clinic All Rights Reserved

[クリニックのご案内](#)[診療内容と方針](#)[料金表](#)[スタッフ紹介](#)[女性外来コラム](#)[みえこ院長エッセイ](#)[トップページへ](#)

みえこ院長エッセイ

第18回 おばあちゃん大好き

私のクリニックには、60歳以上の患者さんが時々みえる。

最高年齢89歳（港区からバス・地下鉄を乗り継いで1人でみえる）。

数年来のお付き合いの方は別として、新患として来られる方は診察室に入ってくるといつもバツが悪そうに話を始める。

今どきの女性外来は、自分には不似合いと思っているらしい。

確かに待合室には若い女性が多く、またカップルや時には泣き叫ぶお子さんを連れのお母さんもいる。

症状はいろいろ・・・子宮脱・萎縮性膣炎・過活動膀胱・自律神経失調症などなど。

どれも年齢と切り離せない疾患なので完治は難しい。

しかし治療により症状を随分抑えることができ、共感と説明により同意を得ることが出来る。

治療を開始し数週間後には、不安な表情は一変して、にこやかな顔になってくる。

そして待合室での違和感も薄れていると、信じているが・・・。

ご姉妹も口コミでやってきてくださることを思えば、やはり違和感はなくなっているのだろう。

実は私はおばあちゃんが大好きなのだ。

あばあちゃんと言わず、年上の女性はとても親近感が持てるのだ。

何故なのか少し自分を分析してみた。

姉が二人、母が忙しい為、お世話係だったチイ母さん、時々遊んでくれた看護師のお姉さん、時々からかわれた看護師のお姉さん、よく3時のお茶に誘ってくれたお台所のおばちゃん達。

わたしの家庭と生活環境は、結構女性社会だった。

お蔭で大学生活・社会人生活では同性の先輩に親しく接してもらうことができた。

だから？この診察室に訪れてくる年配の方には、初めて会っても昔からの知合いのような近しい感覚を感じてしまう。

89歳の方には、いつも言っている<ずっと来てね>と。

彼女も笑ってうなずく。

この年（？）で、70歳の疾患を経験（診察）から知ってしまい、偉そうに説明や治療をする私って、鼻持ちならない？

でも私が心地よく感じる笑顔で、相手は応えてくれるのだからきっと納得なのだろう。

お姉さま方は。

[←目次へ戻る](#)



みえこ女性クリニック
婦人科・産科・内科

〒173-0005

東京都板橋区仲宿 64-6 コスモ和光ビル2F

Tel. 03-5943-1123 Fax. 03-5943-1112

【e-mail】 dr_mieko_1016@coffee.ocn.ne.jp

Copyright(c) 2005 Mieko ladies clinic All Rights Reserved

[クリニックのご案内](#)[診療内容と方針](#)[料 金 表](#)[スタッフ紹介](#)[女性外来コラム](#)[みえこ院長エッセイ](#)[トップページへ](#)

みえこ院長エッセイ

第19回 社会的マナーは、こうあるべき

今どきは路上・電車のなか等々で、目にあまる行為を見ることが多い。

昔のようにそれを正していると、逆にこちらが怒鳴られたり暴力をうけたりしてしまう。

車中の化粧・飲食・大声で話すなどに対し、不愉快な顔はしても声をだして注意する人はほとんどいない。

同じく車中の携帯電話を注意する人も多くはない。

それでも優先席付近での電話は、実際に心臓ペースメーカーを埋め込んでいる方々にとってはヒヤヒヤものである。

実は先日私も電車の優先席でメールの確認をしていて、乗り込んできたご婦人に注意されてしまった。

私としては、ちょうど空席になったのを見計らってスイッチをオンにしたのだが・・・。

当然こちらが違法の行為をしているのだから、＜ごめんなさい。＞と正した。

次の駅で新たに乗ってきた女性が、又電話でメールのチェックを始めると案の定そのご婦人は注意をした。

電話の女性は、＜でもメールなので・・・＞と言い訳。

＜電源は切るように書いてあるでしょ＞とご婦人。

時々、電車のなかにかかってきた電話に対応している乗客がいる。

私たち日本人は、見ていて好ましくない行為や他人の迷惑になっている行為をじっと我慢もしくは見てみぬふりをすることが多い。

しかしその行為が明らかに他人の害になる場合は、私たち自らが自覚して直していかなければならない。

注意を促した70歳前後のご婦人には、脱帽である。

言いたくとも言えないのが、回りで見ている人たちの現状だから・・・。

[←目次へ戻る](#)



〒173-0005

東京都板橋区仲宿 64-6 コスモ和光ビル2F

Tel. 03-5943-1123 Fax. 03-5943-1112

【e-mail】 dr_mieko_1016@coffee.ocn.ne.jp

Copyright(c) 2005 Miko ladies clinic All Rights Reserved

[クリニックのご案内](#)[診療内容と方針](#)[料金表](#)[スタッフ紹介](#)[女性外来コラム](#)[みえこ院長エッセイ](#)[トップページへ](#)

みえこ院長エッセイ

第20回 診察の心得

平成16年12月にここ板橋に開院して、早二年が過ぎた。

一日患者数0名という日もあったが、それ以降順調に来院数は増えてきた。

診察をするにあたって一番心がけているのは、＜私が、患者さんだったら・・・＞ということだ。

私が玄関を入り、診察室のドアを開けこの椅子に座ったらどう感じるか、そしてどう感じて帰っていくか？

女性クリニックに、患者さんは何を求めているか？

女性のきわめてデリケートな器官を診察するのだから、いかにリラックスしてスムーズに診察が行えるか？

プライバシーの保護と納得のいく説明と結果。

単純な一つの症状には、言うに言えない生活のストレスがひそんでいることが多い。

だから自分を患者さんの立場に置き換えて、接するように心がけている。

開業医の世界に生まれおちた私は、本当はかなり我儘で意地悪な子供だったと思う。

他人を思いやるかけらもなかったと思う。

姉弟の中で、生存競争こそ激しかったが周囲からはちやほやと育てられた。

そんな私を強くいわゆるまっとうな人間に育ててくれたのは、清く正しい両親と12歳から始めた運動（テニス）を通しての世界。

その後は、社会に出てからの数々の試練だった。

この試練には、我ながらよく耐えてきたものだと思う。

受験の失敗（よくあること）、結婚（当たり前）、DV、離婚、不登校、癌、肉親の病気や死。

とりあえず一通りの経験はできた。

その度に、自分が世界一不幸だと思って嘆いた。

しかし嘆いても決してあきらめはしなかった。

常に仕事は続け一日も休まなかったし、患者さんとは接していた。

もちろん自らもカウンセリングを受けたし、周囲の助言にも従った。

おかげで今は、多少他人の痛みが解るようになってきた。

自分の体調も回復したし、大変だった子供も半独立状態になった。

こうして自分のお城で、全力投球で仕事に打ち込めるようになった。

患者さんが診察室のドアを開けて入ってきた瞬間、私はその方と同じ心と身体になろうと努力する。

すると患者さんの主訴の下に潜んでいる、日常の大きなストレスを感じることができ、そんな時は患者さんの腫も訴えかけてくる。（冰山の一角は、わずかに海水からみると八分の一だそうだ）

時々外野の音が、その集中を邪魔する。

それはスタッフの声であったり、物を落とす音や扉をしめる音であったり、咳やくしゃみであったり。

たとえ仕事に関することであっても、目の前にいる患者さんと関係ないことでこの集中を乱してはいけないのだ。

スタッフとの集まりでこの話はよくするが、いまだパーフェクトな環境は作られていない。

めげずに又くりかえす。

快適なクリニックづくりの基本は、自分だったら、私だったらという視点から始まると思う。

しかし世の中には様々な性格のひとがいるし、私と感性が異なったひともある。

その場合は、違う感性の先生を探してもらえばよいのかな？

ここで全ての女性を診ることは出来ないのだから。

毎日毎回、診察室のドアが開くのを楽しみにしている。

今度はどんな世界の方がやって来るのかな・・・。

[←目次へ戻る](#)



〒173-0005

東京都板橋区仲宿 64-6 コスモ和光ビル2F

Tel. 03-5943-1123 Fax. 03-5943-1112

【e-mail】 dr_mieko_1016@coffee.ocn.ne.jp

Copyright(c) 2005 Mieko ladies clinic All Rights Reserved

[クリニックのご案内](#)[診療内容と方針](#)[料金表](#)[スタッフ紹介](#)[女性外来コラム](#)[みえこ院長エッセイ](#)[トップページへ](#)

みえこ院長エッセイ

第21回 女性健康外来を担当して

ここ1～2年、大学病院と区の健康センターの女性健康相談を担当している。大学に来る方は、直接専門科に行けば治療がすぐに開始できるような疾患が多い。

つまり治療開始まで、1クッション置いた形になる。

なんと言っても一人当たり30分のわくが取っており、普通の外来ではできないインフォームド・コンセントが十分にとれることが多い。

その上診察費も微少である。

更に大学というネームバリューのおかげで、予約はほぼ一杯である。

一方健康センターを訪れる方には、ある種の特徴がある。

様々な専門の科を回っても原因がわからず、困っている方。

もちろんその中には診断の難しい難病もあるかもしれないが、多くはストレスや生活習慣病から来るものでじっくり話をきいていかないと理解できない病態である。

もう一つのタイプは、かかりつけ医がいても細かい相談ができず一人悩んでいるタイプだ。

少なくとも一人悩みタイプの方が、女性健康相談の記事をみて駆け込み寺のようにやってくるようだ。

しかし悲しいかな健康センターを訪れる方はほんのわずかであり、その理由は立地条件も大きく反映しているようだ。

この相談は無料である。

相談だけで解決するケースは少ないが、少なくともじっくりと話を聞くと病態が浮かんでくるので自分の疾患を納得して受け入れられるようである。

日頃からマイ クリニックでも、患者さんのお話や訴えをなるべく聞くように心がけている。

多くは、訴えを根気よく聞くだけで病気の8割が治ってしまうことがあるから。

時は金なり、時は薬なりである。

[←目次へ戻る](#)

[クリニックのご案内](#)[診療内容と方針](#)[料 金 表](#)[スタッフ紹介](#)[女性外来コラム](#)[みえこ院長エッセイ](#)[トップページへ](#)

みえこ院長エッセイ

第22回 二度目の渡英

再び海を渡った。

昨年に引き続き、二回目の渡英だった。

前は息子をイギリスに置いてくる旅だったが、今回は共に日本に帰れる旅だった。

だから最初から最後まで、気分は上々。

ああだこうだと、いろいろなおしゃべりをしながらの珍道中だった。

今回は外国人のレディファーストのマナーを数回実感させられ、日本人のマナーと比較するよいチャンスとなった。

ヒースローエクスプレスの中で、荷物の収納に手間取っていた時さっと隣に来て手伝ってくれた若者。

地下鉄の乗車口で我先にと、席をきそつてはいる日本人とは違って、自分の席を譲ってくれた外国人旅行者。

駅で地図を見ながらホテルの場所を探していたら、<どこに行きたいの？>と声をかけてくれた駅員のおじさん。

うれしい体験ができた。

日本でも時折うれしい体験をする。

エレベーターの開くマークを押して、先におろしてくれた中年男性。

地下鉄でとびとびの席をつめて、2～3人のグループの席を作ってくれた若者たち。

若い母と子を、愛おしそうに見つめる中年婦人。

日本にだってこんな経験はたくさんあるのに、なぜその印象がうすいのだろう。

たぶん、それにも増してマナーの悪さが目につくからだろう。

旅は少し感傷的なほうが、何かと考え深くなって印象的になる気がする（前回の渡英は、more sentimental）。

行きの飛行機の中で、22歳の女の子に出会った。

彼女は一人で、卒業旅行にヨーロッパ2週間のスケジュールを立てていた。

なんと頼もしい若者だろう。

最近の若者には、海外はそんなに遠い存在ではないのだろう。

息子も、明後日にはイギリスに又旅立っていく。

そう言えば私も、イギリスをそんなに遠い国とは思えなくなっている。

まるで、先日訪れた京都や広島のような感覚だ。

[←目次へ戻る](#)



みえこ女性クリニック
婦人科・産科・内科

〒173-0005

東京都板橋区仲宿 64-6 コスモ和光ビル2F

Tel. 03-5943-1123 Fax. 03-5943-1112

【e-mail】 dr_mieko_1016@coffee.ocn.ne.jp

Copyright(c) 2005 Miko ladies clinic All Rights Reserved



みえこ女性クリニック 婦人科・産科・内科



クリニックのご案内

診療内容と方針

料金表

スタッフ紹介

女性外来コラム

みえこ院長エッセイ

トップページへ

みえこ院長エッセイ

第23回 桜をおって

先日、満開のたわわな桜を弘前（青森県）でみてきた。
ツアーの予定は数ヶ月前から決まっていたが、暖冬でもあり4月中旬までに桜のピークを迎えてしまうのではないかとハラハラしていた。
そもそも東京板橋においても、4月第2週に石神井川の川べりでお花見の予定をしていたが気温の上昇具合からお花見を早めたほどだった。
それでもすでに、桜は散り始めていた。

2泊3日の弘前桜ツアーは、最終日の朝にほぼ満開の桜になった。
満開の桜は何度も経験しているが、弘前城ほどの莫大な数の桜は初めてだった。
確かにその桜の房の数は、はんばではなかった。
満開のたわわなる枝の重さと、その後ろのまたその後ろに続く桜並木そして青空はなんともうっとりする光景だった。

そう言えば数年前、私が闘病生活を終わった春、自宅近くにある桜の老木の下を息子と歩いていて思ったことを思い出す。
〈この美しい桜をあと何回見られるだろう〉と。
それと共にその桜を臉に焼き付けたいと思ったし、二人で歩いた記憶も残したいと思った。

桜にまつわる思い出は、入学式であったり卒業式であったり又人生の門出であったり再出発であったりいろいろだ。
そしてその時々々の光景を回顧するとその当時の光景がまざまざと思い出される。
場面にはその当時の人物・感情・背景が絡み合い写真以上に鮮烈な記憶がよみがえる。
今回の弘前城の桜も、それにまつわる人々・背景・出来事を記憶にとどめてくれるのに違いない。
しかしこれからの人生で、この桜にいったい何回遭遇できるであろう。
今年は私たちを待って咲いてくれた、有難う。
これで更に桜にかかわる私の思い出が増えた。

また来年を約束して帰途につき、来年も元気で再会できることを願った。

[←目次へ戻る](#)

〒173-0005

東京都板橋区仲宿 64-6 コスモ和光ビル2F



みえこ女性クリニック
婦人科・産科・内科

Tel. 03-5943-1123 Fax. 03-5943-1112

【e-mail】 dr_mieko_1016@coffee.ocn.ne.jp

Copyright(c) 2005 Mieko ladies clinic All Rights Reserved